

第3部会—資料18

第3部会	分野	子ども
------	----	-----

A欄に関する意見メモ

(現基本構想の進捗検証・評価)

- 身近なところで先輩お母さんつながれる仕組みがあるのは良いこと
- 行政が直接もしくは委託により担っている事業は、きめ細かく充実している
- 育む環境の育成支援（地域づくり）が不足している。子育て家庭の4割が家庭保育であることから、家庭保育の支援もしっかりと行う必要がある

(今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点)

【全般】

- 人生100年時代を見据えて
- 行政も近いうちに限界が訪れる
- 区民に自分たちで自分たちの社会をつくろうと思ってもらう
- お互いに配慮しあいながら、頼っていいんだよ、間違っていないんだよと言い合える社会を作る

【子どもの居場所】

- 野球チーム、サッカーチーム、塾といったコミュニティが発達し、そこが居場所になっている子どもも多い
- 時間・空間・仲間・世間の「4間」が失われている

【新しい評価・多様性の受入れ】

- 「孤立」「評価が厳しい」社会になってしまった
- 横の多様化が縦の序列化に結びついていて、保護者は評価をされないようにもしくは評価が高いようにと子どもに求めている
- 社会全体が個人を下に落とそうとする評価の仕方になっている
- 親が多様なものに対して拒否反応を示し、親が画一的なものだけをよしとし、評価するので、枠から外れるものへの色眼鏡が強い。多様なものを受け入れるという考え方が馴染んでいない
- 単一の親の価値観、社会の価値観で子どもたちが覆われている
- 先生の社会的地位が低い、先生が保護者の意見に従ってしまう
- 人と人がぶつかることが対面授業の利だが、先生たちは親を気にして子どもに当たり障りなく対応している
- 多様な価値観を受け入れられる柔軟な視点を持った親を育てる必要がある
- 保護者を評価しない子育て

【地域での子育て】

- 「親はいても子は育てない」という状況。地域の人が仮親として子どもたちをサポートしていた時代が終わり、実親しかいなくなったところに子育ての難しさ、問題がある
- 親が孤立している
- 地域の教育力がなくなり、行政に頼らざるを得ない。教育自体が公共財のようになり、保護者が放棄しつつある
- 地域で子育てをしなければならないが、その地域も今はガタガタの状態
- 貧困も子どもの生きるエネルギーを奪う。それをどうキャッチアップするか
- リモートワークしながらでも子育てしやすい環境
- 地域に教育を戻す

【スポーツ】

- 子どもたちの体力の低下が両極端になっている
- 生涯スポーツの入口となる幼少期に基本ベースとなる体力を培う必要がある

【その他】

- 要保護家庭支援は、基礎自治体である杉並区の役割が大きくなる

B欄に関する意見メモ

(目指すべきまちの姿)

- 子どもたちが嬉々として生活できる
- 評価されない子育てができる
- 地域で子どもを育てる

(目指すべきまちの姿を設定した考え方など)

- 評価を変える
- 社会意識・価値観を転換し、発信する
- 多様性が大切
- 評価されない、それでもいいよという意識を持てる社会にしていく。嫌だよ、という声を拾う
- 行政がこれまでやってくれたことを、地域に戻す
- 「孤立」を防ぎ、「つながる社会」にする
- 地域住民のパワー・エネルギーを行政がきっかけを作って、引き出す。地域住民が主体となり、行政がきっかけを作り、住民が関わっていく

C欄に関する意見メモ

(基本的な取組の方向性)

【居場所づくり】

- 学校や家から逃れられる第三の場所があると良い。児童館等の確保が大切。親の価値観や学校・先生を変えるのは難しい。子どもが異世代間で交流できる場所や逃げられる場所を与えてあげる
- 子どもたちが未来へ自信をもって、のびのびと育っていく社会が必要

【新しい評価・多様性の受入れ】

- 親も大人も、行政も含め、社会として多様性を認めることが一番重要
- 子どもたちの声を聞ける社会・地域社会にするため、大人の意識改革をし、親自身も育てていく
- 無関心層の親の子どもにどう参加してもらい、経験してもらう。機会を与え、子どもの才能をどう生かすかが、多様性につながる
- 先生に地位があり、権威ある人を信頼できれば、安心して任せることができる
- 評価の在り方を変えていく。「良いところを伸ばす」評価。良いところを認めてあげる評価が必要である。社会の中に、子どもたちが評価を受けなくていい場所、「悪だくみ」ができる場所が必要。子育て中の母親にも必要

【地域の力の活用】

- 実親に代わる「地域親」「コミュニティペアレンツ」が子育てをサポートしていく
- 杉並区は地域住民の意識も高く、NPOなどもたくさんあることから、行政がその力を引き上げてサポートし、活かしていく

(具体的な手段・方法、取組など)

【居場所づくり】

- 校庭開放などを活用し、子どもが体を動かせる環境づくりが必要
- 地域のクラブチーム、学童クラブ、児童館など、家庭・学校以外の3つめの居場所が重要
- 野球チーム・サッカーチーム、塾といったコミュニティと行政がコラボレーションして子どもの居場所をつくる
- 子どもを同い年の中で遊ばせるのではなく、比べられることのないアクティビティをたくさん提供する
- 世田谷区の羽根木公園のような地域の就学前の子どもを持つ母親たちが自主保育も行いながら運営するプレーパークをつくる

【新しい評価・多様性の受入れ】

- 学校でいじめがあったとき、その子にとって学校に戻すことが一番大切ではない。必ずしも不登校をゼロにするのではなく、それを踏まえた上で競争と距離をとるにはどうすればよいか考える必要がある
- 先生アワード
- 交流自治体へもっと頻繁に行き来できる仕組みを作り、学校単位ではなく学校混合で行けば、普段と違う体験ができる
- プロジェクトベーストレーニングや子どもたちが地域の方たちに対して発表するというような仕組みもをつくり、地域の人たちに採点してもらい、学校の中だけでなく地域の評価も取り入れる
- 嫌だなどということと話ができる社会、仕組みを作る。杉並区でも、声を聞いてもらえる仕組みを作り、子育て中の親の大変だという声も聞くことのできる仕組みを作る
- 程よく、質のいい不良をいかに育てるか。フランクな子どもが育つ環境をいかにつくるか

【地域の力の活用】

- 行政は小さくてもいいから何か地域で支える仕組み、居場所づくりを。子どもを主役に、地域のおじいちゃんたちが関わるプレーパークを学校の中につくる
- 世田谷区のように子どもへのサービスとして、ネグレクト家庭へ大学生を月に2回派遣し、子どもの支援を行う
- ディズニーランドの簡素なものを作り、住民のアイデアを出し合い、住民の手伝いを得ながら運営する
- すぎなみボケモンラリーをやる。子どもたちが色々な施設を巡り、スタンプではなく飴や文房具がもらえて、子ども食堂や本当に困っている人しか行かないところをみんなで回り、色々な人と巡り合え、触れ合える。イベントとして1回しかやらないのではなく、当たり前にと続いている